Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P2

子どもの声と音楽的表現（3）

かかわり・身体・イメージの視点から

○今川　恭子　　志民　一成
（東京芸術大学）　（東京成徳短期大学）

はじめに

声を介した子どもの表現が意味をもつのは，相互作用し合う他者とのかかわりや，子どもを取り巻く様々なモノとのかかわりの中，さらに子どもが経験する（してきた）諸々の事象との脈絡の中においてである。

こうした観点から考えると，意味という側面も含めて子どもの音声表現の育ちを解明するためには，外側に現れ出た音のみを対象化して分析するのでは不十分である。一方では子どもの音声表現が生み出される文脈の中での意味形成プロセスの検討，そしてもう一方では声の分析とが，有機的な関連づけをもってなされなければならない。

Ⅰ．目的

本研究は上記のような立場に立ち，幼稚園における様々な場面での子どもの音声表現を取り上げて，下記の①②③を目的として行われる。

①声を介した子どもの表現がどのような脈絡をもって生起しているのかを検討することによって，それらがかかわりの中でこそ意味を帯びるものであることを示す。

②今川・志民（2002，2003 a）が，声を介した子どもの表現を捉えるための重要な視点として提示した，「かかわり」，「身体」，「イメージ」の視点からの具体的な事例分析を提示して，視点の有効性を確認する。

③上に関連づけて，それぞれの事例における音声の特徴を分析し，声を介した子どもの表現の育ちの道筋を描きだすための一つの契機とする。

Ⅱ．方法

以下に取り上げて分析・検討する事例は，東京都杉並区のN幼稚園において継続中のフィールドワークを通して収集したものである。観察者（今川）は週に1回園を訪れて子どもたちと1日を過ごし，フィールドメモをとりながらMDによる録音を行った。子どもたちに対しては，自然的な態度で関わっている。その結果，事例中にも見られるように，時として子どもとのあいだに緊密なやりとりが発生することもあった。こうした場合も，観察者自身の行動を含めて，その場に起こった現象を出来るだけ網羅的に記録し，かかわりも含めた考察の対象とした。

収集したデータの中から事例を抽出し[1]，フィールドノートに基づく文脈の解釈と併せて，機器による音声の分析を行った。

Ⅲ．事例と考察

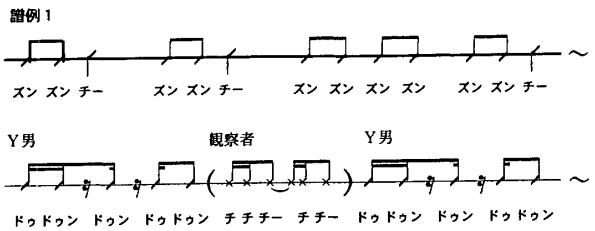
1．かかわりの中で形づくられ，意味を帯びる声

［事例 1：粘土の携帯電話でのやりとりから発展したY男の表現］

4 歳児クラスの部屋では，ダンボール箱をつなげて「ねずみの穴」に見立てたものを通り抜けながら，子どもたちが遊んでいる。

Y男は，冬休み中のスキーで骨折して動けないため，ねずみの穴で遊ぶことが出来ず，教室の隅のままごとコーナーに座って粘土を粘土板の上でこねている。Y男は粘土で「キノコ」や「携帯電話」を次々に作り，観察者はそれらを介してY男といろいろなやりとりをしていた。

そのうち，粘土の携帯電話は 2 つになり，一方をY男，もう一方を観察者が持った。Y男と観察者との間でのやりとりは，言葉を中心としたものから，擬音語などを交えつつ次々と形を変え，二人の間に成立する意味もまた変容していった。やがて二者間で交換される音声自体の面白さを意識しはじめたY男が，「ズンズンチー　ズンズンチー　ズンズンズンズンズンズンチー・・・」とヴォイスパーカッションのような声を出し始めた。これに観察者が応じたことから，Y男の音声表現は［譜例 1］のようなものに発展していった。（2003 年 1 月 29 日）



NII-Electronic Library Service

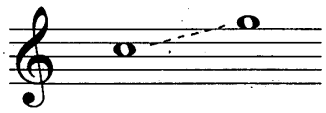
Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

2. イメージと声のコントロール

［事例２：動物のイメージが生み出す裏声と地声の使い分け］

３歳児クラスのＳ男は，お帰りの挨拶が終わったあと，園庭で待つ母のところには直行せず，テラスにおいてあるドールハウスの中で熊と猫の人形を動かしながら，一人で遊んでいる。猫が熊に追いかけられているようだ。ドールハウスの中を逃げ回る猫を動かしながら，「よいしょよいしょ」，「わー，やだやだにげろ」などと，かなり高い裏声を使っている［譜例 2］。一転して熊を動かす時は「ガオー，オー」と，低い地声になる。

譜例 2



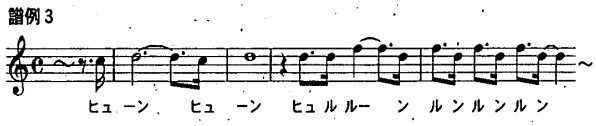
裏声と地声の対照的な声の使い分けという，大人にとっては困難も伴うような声の技能を，Ｓ男は猫と熊のイメージに基づいて，ほとんど無意識的に駆使していることが伺える。(2002 年２月６日)

3. 身体の動きが結ぶイメージと声

［事例３：「風」を表す動きと裏声の一致］

４歳児クラスの一斉歌唱の場面。保育者のピアノ伴奏にあわせて，子どもたちはゴザに座って，〈北風小僧の寒太郎〉を歌っている。地声で歌っていた子どもたちの一部が，「♪ヒューン　ヒューン　ヒュルルーン　ルンルンルン」のフレーズにさしかかった時，右手の人差し指で自分の胸の前あたりに輪を描きながら，裏声を使って高い声を出した［譜例３］。

譜例 3



この時の子どもたちの声は，従来我々が見逃しがちであったような高い能力を示している。そしてこのような声による表現の技能の背後には，身体の動きが風のイメージと裏声という所産とを結ぶ要として存在している。ともすると孤立した活動として扱われがちな一斉歌唱も，子どもたちの日常的な経験と連環した表現のひとつであることがわかる。(2003 年３月５日)

Ⅳ. まとめ

分析・検討した事例は，色々な場面における子どもの声である。これらが示すことは，声を介した表現の育ちが，大人のカテゴリーの境界の中に閉ざされて進行するというよりは，遊びを中心とした幼稚園生活における多様な場面において，さまざまなかかわりを通して多彩な形を示しながら展開している，ということである。３つの視点については，実際の子どもの表現の中ではかかわりを基盤としてすべて絡み合った要因となって働いているが，子どもの音声表現の背後を読み解く視点としては有効であるといえよう。

事例の分析はまた，子どもの声の能力的側面，特に声域および声区の自覚的コントロールについても，子どもは従来考えられてきたよりもはるかに豊かな可能性をもつことを明らかにした。つまり，子どもの声を介した表現の育ちは，一つの領域の中での能力の伸長だけを見ているのでは，捉えきれないのである。

更に多くの事例を，かかわり，身体，イメージの視点から検討していく必要性が示唆されたと言ってよい。

注

(1) 本稿は，ある音声表現が音楽的であるかどうかを予め明確な一線によって画してカテゴライズする立場をとっていない。したがって，事例の抽出にあたっては，我々が文化的な慣習の中で音楽的と受け止める傾向にあるような徴候が音の中に見出される場面を抜き出している。こうして，帰納的に子どもの音声表現における「音楽的」なるものを規定していこうとする立場である。

引用および参照文献

今川恭子・志民一成(2002)「声の再検討」『保育の実践と研究』vol.7-no.1，スペース新社保育研究室／相川書房　pp.50-61

今川恭子・志民一成(2003 a)「子どもの声と音楽的表現(1)：幼稚園の様々な場面における『声を介した表現』の検討から」『日本保育学会大会発表論文集』

志民一成・今川恭子(2003 b)「子どもの声と音楽的表現(2)：声および声域をめぐる議論の再検討」『日本保育学会大会発表論文集』

志民一成・今川恭子(2003 c)「幼児の声の再検討：フィールドワークによる音声表現の分析を通して」東京芸術大学音楽教育研究室『音楽教育研究ジャーナル』No.20，pp.1-14

NII-Electronic Library Service